

本因坊道策（1645～1702）前に古人なく、後に来者なし

古今独歩の名人、碁聖と讃えられる本因坊道策、祖父は松浦但馬守といい、戦国の雄、毛利元就の幕下で1万国を領した。後年、石見大田村山崎に住み、里人敬して山崎公と称したので姓を山崎にしたという。父はその子善右衛門、母は芸州の出、元細川越中守綱利の乳人で、賢夫人、賢母の誉れ高い。三男三女あり、男子は七右衛門、三次郎、千松。長男七右衛門が山崎家を継ぎ、二男三次郎が本因坊道策、三男千松が井上道砂因碩である。山崎家からは後に十世井上因砂因碩を出している。現在の当主は尚志氏。十数年前道策の三百年法要が営まれている。道策は正保2年（1645）、石見国馬路村神の前（現島根県邇摩郡仁摩町馬路五四二番地）に生まれた。徳川家康が江戸に幕府を開いて四十二年、大坂夏の陣から三十年である。本因坊家は一世算砂（559～1623）はずでに亡く、二世算悦（1611～1658）の時代だった。道策は七歳の時に碁を覚えたという。万治元年、道悦が本因坊三世を継ぐが、この頃入門したと思われる。十四歳である。寛文七年、安井知哲とともに御城碁に初出仕したのが二十三歳。元禄九年まで御城碁は十六局勤め、十四勝二敗。翌八年、安井算知の名人碁所就位に道悦異議をととなえ、「遠島を賭けた」壮絶な争碁、算知・道悦六十番碁（延宝三年、二十番で終了）が始まる。この間に道策の芸はいよいよ上がり、師の道悦を越える域にまで達する。争碁は第十六局で道悦先相先に直り、第二十局まで互いに先番を勝ち、道悦三勝一敗で終了。延宝四年、算知は碁所を返上する。弟子の道策の存在が大きかったと言われる。延宝五年九月十八日、道悦は退隠、家督を道策に譲り、名人碁所に昇格した。「道策の洗練された序盤戦略は革命的なものでした。道策流は当流といわれ、これに反するものを算知流と称した。それまでの打ち方がいっぺんに過去のものになった。道策が活躍した十七世紀後半は、長く続いた戦乱の記憶も薄れ、徳川幕府がゆるぎない地歩を固めた時代である。延宝六年（1678）名人碁所についた道策は、家元制の確立に力を注いでいた。井上、林家は敵対する安井家とは違い本因坊家の系列である。井上家には道策の実弟の道砂を三世井上因碩としてあてがい、跡目に桑原道節をつけた。また林家の二世門入から、息子を託され三世としたが、これが碁に向かない性格で、結局道策の高弟の片岡因竹が四世を継ぐことになった。道策が後世「碁聖」と讃えられるのは、抜群の強さからですが、強い指導力で囲碁界の発展に尽くしたからである。幕閣にも太いパイプをもっていました。なにせ将軍綱吉の側用人牧野備後守成貞は道策の弟子だった。牧野の棋力は指折りで、本因坊道悦と道節に先で打った棋譜が残されている。のちに家督の不手際で窮地に立った熊本細川家を、道策と牧野が協力して救う話が座隠談叢に残っている。藩主綱利の乳母は、道策の実母という関係であった。天和二年（1682）に、琉球一の碁打ち、雲上浜比賀が来朝し、島津家を通じて本因坊との対局を望んだ。道策これを受けて四子で二局打ち分け。上手（七段）に二子を許すと書した免状を贈った。元禄元年（1688）に一世算砂の追善碁会を寂光寺で行う。名代は小川道徳と道節因碩。この道徳が跡目として大きな期待をかけていた天才だった。道徳は二十一歳で夭折する。結局道知を道節にゆだね後事をたくし、元禄十五年三月五十八歳の生涯を終えた。 完